

氏名	齋藤 愛未
ヨミガナ	サイトウ マナミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第725号
学位授与年月日	令和5年3月27日
学位論文等題目	（論文） 接続と孤立のインタラクション （作品） 遠神恵賜

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	吉村 誠司
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	高島 圭史
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	宮北 千織

（論文内容の要旨）

私は、周囲との距離を“心地の良い孤立”になるように測っている。自身が核家族であることや、兄弟姉妹がいない環境にあることが、孤立や独立への共感や、そうした距離感のとり方に影響しているのかもしれない。この距離感は自身の絵画制作においても、モチーフの選択基準や作品構成に影響している。

本論文にいう「接続」とは、モチーフとなる対象と社会、モチーフと作者、作品と作者、作品と観者などが、心の働きを伴って互いに繋がることであり、「孤立」とは、対立・対応・連続することがなく、非共感状態である。そして「インタラクション」とは、この接続と孤立が相互に関係し合う状態である。コロナ禍によるオンライン化が、ビデオチャットの活用などによる非対面のコミュニケーションと距離感を生み、接続していても孤立していると同時に、孤立状態からでも容易に接続が可能な状態になっている。

本論文では、作者と作品において「接続」と「孤立」がそれぞれに呼応し合い、自作品の鑑賞が観者の意識に影響を与えることで新たな現実認識へと繋がっていく試みについて論述した。またその方法論として、レイヤー構造と修辞表現を用いていることを述べた。

レイヤー構造とは、画面が階層状態になっており、各層（レイヤー）に込められた様々な要素が積層している状態である。この多重構造が生み出す空間には、多様な解釈から多くの接続が生まれ、シンプルな解釈にならない効果を期待できる。修辞表現とは、言語の世界で発展してきた表現方法で、比喩や擬人法などが含まれる。絵画の世界での比喩や擬人法は、モチーフをあるものに喩えたり見立てたりして、連想を促すことを目的に、豊かで深い表現を生んできた。この修辞表現を使用することで、様々な解釈に基づく接続が生まれ、観者によっては作品の意図にダイレクトに接続するケースも期待できる。

自作品は、このレイヤー構造や修辞表現を併用し複雑にすることで、観者に知覚の「ぶれ」や「ずれ」を伴って解釈の幅が生まれ、観者の内に新たな触発が生まれることを試みている。

本論文は序章、本論（3章）、終章で構成される。各章の概略は以下のとおりである。

第1章「接続と孤立の併存」では、自身の絵画制作の初動段階について解説した。私は日常の中でシンパシーを覚えた事象に、自己の感情をリンクさせて絵画化を図る。自作品に混在する接続や孤立は、共感性や自己隠蔽によって生み出されている。感情移入の要因である共感性やアニミズムは、「接続」と類似する派生的形態である。また一人っ子だった私が、周囲（人に限定されない）との距離感を常に測りながら、自作品でも作意を容易に推し量られないように構成していることを述べた。

第2章「イメージのぶれとずれ」では、自作品が、イメージの可視化と作意の隠蔽を目的として、レイヤー構造で“ぶれ”、修辞表現で“ずれ”を生じさせていることを解説した。一枚の作品に何層ものレイヤー構造を用いた構成には、一層、二層、三層と重ねていくレイヤーの、一つ一つに意味を持たせていること、そして意味を持つそれぞれのレイヤーを重ねることで、観者のイメージにぶれ（解釈の揺れ）を生

じさせようとしている。修辞表現では、客観的に存在する対象を喩え（見立て）によって別の対象に置き換えることで、観者の知覚にずれを生じさせようとしている。レイヤー構造及び修辞表現を用いた自作品を例に、観者に生じる様々な知覚について具体的に明示した。

第3章「イメージの喚起と新たな現実認識」では、第1章及び第2章を踏まえ、作品を介して観者の思考空間にアプローチすることを論じた。提出作品「遠神恵賜（とおかみえみため）」の解説として、レイヤー構造、修辞表現を用い、観者の多様な解釈を生む試みについて具体的に示した。メインモチーフの瞽女（ごぜ：盲目の芸能者）について、不条理といった負の観念への共感性や視覚障害者との接続から、このモチーフに着目したこと、また複数のレイヤー構造と修辞表現を併用することで、観者の内に多様な触発を生み、その先の新たな現実認識に繋がることを想定していることを示した。

終章では、本論文のまとめと、今後の課題と展望について述べた。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、レイヤー構造で異なる画像を同一画面に重ね、そこから観者の新たな解釈や連想を誘発しようと試みている筆者の創作論である。

筆者は自身の作品が新たな展開の契機となることを期待しながら、一方で安易な理解を嫌い、“分かる・分からない”が混在する形での観者とのコミュニケーションを望んでいる。論文タイトル「接続と孤立のインタラクション」の「接続」「孤立」は、その状況をさしている。そして観者の興味と疑問を同時に誘発するため、「見立て」や「ぶれ」「ずれ」など様々な仕掛けを画面に仕込んでいる。

第1章「接続と孤立の併存」では、「接続」と「孤立」をコントロールするため、心理学を引用しながら、まず「共感」の仕組みについて確認する。筆者がこうしたスタンスをとっているのは、基本的には一人っ子として育ち、他者との距離感に敏感だった筆者の性格から、“心地のよい孤立”の状態を意図的に作ろうとしているためらしい。また筆者が実際に選択するモチーフにも、物語性や主題の一貫性はうすく、むしろ接続と孤立を演出する方に腐心している様子が窺われる。

第2章「イメージのぶれとずれ」では、象徴主義など過去の作品やこれまでの自作品を例に、同一画面に異なる画像をレイヤー的に重ね、イメージのズレやブレを生む方法について具体的に解説している。開店前のジャズバーの室内風景に、筆者が外からのぞく時にガラスに映った背後の屋外風景を重ねた、自作品の「リズム」。サンディエゴ空港で見た、大西洋単独飛行をリンドバーグが達成した時のプロペラ機の機体に、ゼロ戦の機体を重ねた自作品「粒子化の果て」など。実験をくり返すこれらの作品には、試行錯誤と強いモチベーションが表れている。

第3章「イメージの喚起と新たな現実認識」では、提出作品「遠神恵賜（とおかみえみため）」について解説する。上越高田で取材した盲目の女性旅芸人「瞽女」の話を描いたこの作品には、高田の町並み、春夏秋冬の季節、瞽女と頭光をもつ女神のような人物描写など、いくつもの文脈のモチーフが織り込まれている。その全体を瞽女という物語が包み込むことで、実験的性格が強かったそれまでの制作から、モチーフと意味がかみ合った新たな段階に入った様子を窺わせる。

筆者自身、今後の課題として書いているように、審査員からも、多様なイメージ喚起への期待と、核心を秘匿したい欲求が併存しており、また光画像ではなく岩絵具によるレイヤー的な描写が、画面に分かりにくさを生んでいるという指摘があった。それは論文の記述にもやや現れた感があるが、提出作品での新展開は今後の方向性と可能性を感じさせ、また本論文も学位に十分な内容とリアリティの強い考察として、審査員の承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

齋藤は博士課程において、作品と観者の関係に注目し、モチーフの選択や制作プロセス、表現方法を精査する制作と研究を一貫して行ってきた。

作品と観者の関係には、作品が観者に与える影響、観者が作品を解釈する過程など様々な観点があるが、齋藤はそれらを「接続」と「孤立」というキーワードで捉えなおした。このキーワードが設定された背景は、齋藤が核家族で兄弟姉妹のいない環境で生まれ育ったことにあるという。

いわゆる一人っ子であった齋藤は、周囲との人間関係を「心地の良い孤立」になるよう測っていた。この経験を基にして制作と研究を進めた結果、絵画作品が他者とのコミュニケーションやインタラクションとして機能する可能性や魅力を再確認するにいたったようだ。そこで齋藤は、観者が作品と接する際に抱く共感や違和感を、補完したり攪乱したりする仕掛けを作品上に設けることで、観者の意識や思考が触発され観者が周囲の世界と接続する在り様に変化することを期待できるとした。

また、齋藤は修士課程で「国宝 信貴山縁起絵巻」現状模写制作に取り組む中で、平安時代の絵師の造形上の工夫、その背後に表現される物語性や世界観についての知見を得た。この現状模写への取り組みによって、イメージを観者に伝達する仕組みやメッセージへの共感をもたらす仕掛けについて、美術史上の作品を分析する視点と齋藤自身の作品制作を精査するための補助線を獲得した。

提出作品「遠神恵賜」は瞽女（ごぜ・盲目の女性芸能者）をモチーフとした作品である。齋藤が瞽女の生き方そのものに「接続」と「孤立」、絵画と同様のインタラクションを感得したところから制作が始まった。瞽女の生活を追体験するように新潟県上越高田や直江津で取材を徹底して行ったことによって、瞽女が感じたであろう雪や風、奏でたであろう三味線の音色や唄声といった感覚も表現の対象となった。加えて、絵画や文学、アニメーションなどの分析を通して「見立て」や「修辞法」、「目くらまし」といった表現方法を再確認して獲得し、自身の特徴的的制作方法であるレイヤー構造に応用することで、目に見えない感覚の造形を通した心象表現や時間表現に挑戦した。

以上のように提出作品「遠神恵賜」は表現内容と造形のねらい、制作方法の意図が明確であり、縦181.8×横545.4cmの大きな作品サイズも相まって、空間的な広がりイメージの奥行きを感じさせる迫力のある作品となった。

齋藤の制作と研究は、日本画画材を用いた表現を土台として、何をどのように描くのか、誰に何を伝えるのかという、絵画制作の本質を問い直す試みでもあった。その試みは提出作品「遠神恵賜」において実験段階を経て次の段階へ進んだ。日本画の表現や技法についての新たな発想を創出するために、今後の継続した制作と研究が期待される。

以上の点から、提出作品「遠神恵賜」は審査会において学位にふさわしい優秀な作品であると評価され、審査員全員一致で合格とした。

(総合審査結果の要旨)

彼女の論文では、絵画における表面的技法であるレイヤー（層）と内面的な作意である気持ち・修辞法（比喩 擬人法）の説明と解説を行っている。

そのため、制作もレイヤー（層）と修辞法（比喩・擬人法）を基盤としている。

レイヤー・修辞法の表現は、修士の制作において既に行っている。レイヤーとはいわゆるダブルイメージ的表現で、2つ以上の別の物を組み合わせ、融合させる事により観者に自分の思いを伝えやすい、40年程前に流行った表現でもある。元の絵の空間に別の世界・彼女自身の気持ちをも重ね、独自の世界を表現した物と物質的空気との融合だった。現実の世界に漂う空気が不思議な世界を醸し出し、力づよい画面で構築されている。一見して何が描かれているかわかりづらいものもあるが、時間が経つにつれ、いろいろなものが見えてきて奥深さを感じる。瞬間的な時間を切り取った絵画世界で、時間の経過を表す事に成功している。

修辞法は、卒業制作「百羅漢」で行っている。庭に置かれた鉢を羅漢に見立てたそうだが、おそらく彼

女の意図・思いを画面を見て感じた人はいないだろうと思う。「百羅漢」を初めて見たときに「何故この題なんだろう？」と思った記憶がある。彼女の説明を受けて初めて分かる事柄だ。絵画として表現するには、枯れた植木の鉢を造形し直し、百羅漢に感じさせる作業が必要で「百羅漢」は説明されなければわからない。絵は見て感じるもので説明されて理解するものではないと思う。しかし、修辭法の意図とは別に「百羅漢」は面白い狙い深い色彩、完成度の高い絵として高い評価を得ている。

博士発表作品「遠神恵賜」は瞽女を主題に、レイヤー表現と修辭法を用いて描かれている。力のこもった作品で見ごたえがある。只、単色の作品が目が見えない人＝色がわからない＝白黒の世界＝修辭法等、修辭法とは聞くまでわからないが、彼女の瞽女に対する思いの構図と絵画としての色彩、的確な技法により絵画として完成度の高い作品を作ることが出来た。

博士課程で制作した他の絵はやや難解ではあるが、院展にも連続入選し先生方からの評価も高い。レイヤー表現は彼女の中で確実に昇華され、発想の原点である修辭法は不思議な世界を導き出し、私たちが勉強してきた考え方とは違うアプローチによって新たな世界を築く可能性がある。

論文と制作の整合性は感じ、作品自体の熱量も感じる。齋藤さんが今後この思いを更に昇華させバランスをとることによって他の作家に影響を与える作画を作る可能性は感じられる。私個人の思いで否定できない良い物も感じる。このことを踏まえて合格とする。